

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための ボランティア情報

2015
No.460



「中越地震と大きく違うのは、子どもと母親だけで避難した方が多かつたことです。辛い気持ちを抱えて慣れない土地で生活する母子に、必要な情報提供や相談ができる場を提供するなどの支援を私たちちは行つてきました」震災から4年が過ぎ、母子とともに新潟での生活に慣れてきてはいるが、入園、入学など子どもの成長に伴う新たなニーズが生じる中で、母親一人ひとりにも個人的な悩みが生まれてきてているという。孤立や孤独を防ぐためにも「声を聞く」ことを第一とし、自分たちでできる支援を考えながら活動を続けたいと、椎谷さんは語ってくれた。

「にいつ子育て支援センター 育ちの森」は、乳幼児とその家族のための子育て支援施設で、福島県から自主避難してきた母親たちのサポートにも、早期から取り組んでいます。運営するNPO法人ヒューマン・エイド22は、2004年に起こった新潟県中越地震の被災地で、小さな子どもを抱えた母親たちにアンケート調査を行った。「授乳できる場所がない」「夜泣きで迷惑をかけた」などの深刻な声が寄せられました。避難所にいることができず、車までの生活を余儀なくされた母親たちも多くありました。この実情を伝え、今後に活かしたいと、216人の母親の声をまとめで冊子にしました。小さなお子さんを抱えての避難生活がどれだけ大変なのかを知ることができたからこそ、東日本大震災後はいち早く、福島から避難してきた母子の支援をすることができました」と、ヒューマン・エイド22の代表で、「育ちの森」の館長でもある椎谷さんは語る。

自主品牌避難している母親たちが徐々に育ちの森に集うようになり、2011年の10月には「福島限定日」を設けた。「方言を気にせず話ができる」「リラックスできる」「同じ境遇の人と情報交換ができる」と喜ばれ、これを機に福島の母親たちが定期的に集う子育て

中越地震での経験を活かし、母子避難者に寄り添う

新潟県新潟市

にいつ子育て支援センター 育ちの森 館長

しい や てる み
椎谷 照美 さん

Contents

9月号 特集テーマ 災害ボランティア活動における学生・大学ボランティアセンターの力

- 06 災害ボラセン運営の現場
災害VC、復興期のNPOの活動

07 ボラセンそもそも
ヒストリー
第6回 JYVA(ジバ)と
1960年代のまとめ

07 団体を応援するために
知っておきたい助成金のキホン
第6回 「締切前日から準備を始めちゃ
いけない3つの理由ーその3」

08 保険のひろば
・ボラフェスふくしま番外編
・INFORMATION
・事務局だより



災害ボランティア活動における学生・大学ボランティアセンターの力

学生のボランティアへの関心が高まった一つの契機として、阪神・淡路大震災があげられます。被災地で学生ボランティアが創意工夫をもって支援活動を展開した姿によって、あらためてその意義や成果が社会に認識されるとともに、多くの学生がボランティア活動に取り組むようになったと言われます。

その後の災害においても被災地に多くの学生の若い力が集まって、様々な被災者支援活動が行われています。さらに、学生のボランティア活動を支援する大学ボランティアセンターも、被災地域の大学と連携を図り、また、地元で災害が起きた時には地元社協や関係機関と協力し、大学ボランティアセンターとしての特色を活かした活動を実践しています。

これからの災害時のボランティア活動においては、学生ボランティアや大学ボランティアセンターとの協働は大きな力となる可能性があります。本号では学生ボランティアによる災害支援の実践や大学ボランティアセンターの役割や強みを紹介します。



日本福祉大学災害ボランティアセンター
学生副センター長（社会福祉学部 社会福祉学科4年）

永田 雄基 さん(左)
学生事務局長（社会福祉学部 社会福祉学科3年）

齊藤 翔 さん(中央)
副センター長
(日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科 準教授)

野尻 紀恵 さん(右)

学生が立ち上がり 災害VCを立ち上げ、活動を開始

野尻 日本福祉大学災害ボランティアセンター（以下、日福災害VC）は、東日本大震災発災直後、2011年3月に立ち上げました。本学には200近いボランティアサークルが活動していることもあり、それまでVCを組織していなかったのですが、発災直後に学生が立ち上がり、「寄り添う支援をしていきたい」という思いから学生と教職員が一緒になって日福災害VCを立ち上げました。学生スタッフとボラセンに関わる教職員はフラットな関係で企画・運営しているのが特徴です。



活動を開始してから3年ほどは東日本大震災被災地支援をメインに活動

してきましたが、最近では、各地で災害が発災したときには募金活動等を行い、カウンターパートナーとの連携がとれた場合には被災地に行って支援しています。

同時に、私たちが被災地で学んだことを本学のある美浜町や知多半島の防災・減災に活かしていく地域活動の取り組みを進めているところです。

ずっと寄り添っていきたい

永田 「萩の花プロジェクト」は宮城県石巻市の避難所での活動から始まったプロジェクトです。石巻市の開成団地（応急仮設住宅団地）に学生ボランティアが行って、地域の方々や子どもたちと一緒に活動しています（2011年のGWに開始し、夏・冬・春の長期休暇等に実施）。

地域の方々がどんなことを必要としているのかを、担当チームのみんなで考えて企画を立てています。2015年夏のプロジェクトでは、「仮設住宅で暮らしてい

る方が自分ひとりでは掃除ができないところがあって困っている」という話を春のプロジェクトに参加した学生が聞いたことから、子どもたちとの交流に加え、おそうじ活動を企画しました。

野尻 学生スタッフはボランティアコーディネーターの役割をしています。VCがプロジェクトの周知を行い、希望する学生が活動に参加しています。

齊藤 「いわてGINGA-NETプロジェクト」にも多くの学生が参加しています。自分は2回参加し、釜石市や大槌町で活動し、活動を通じてつながった人から当時のお話を聞かせていただいたり、漁師さんのお手伝いをしてきました。

「自分にできることをしたい」 学生の希望から 災害ボランティア活動に入る

永田 2013年9月に台風18号被害が発生したときには、福井県若狭町に水害復旧支援ボランティアに行きました。

学生から「支援に行きたい」という声

地域の人たちのニーズと 支援したい学生の思いをつなぎ 寄り添う支援を続けたい



があり、次の手順で支援に行きました。①福井県社協(日福大OBの職員)に連絡、②福井県社協のコーディネーターで若狭町に入って活動することが決まる、③すぐにボランティアを募集し、学生と教職員約20人が応募、④発災6日後の日曜日の9月22日に早朝4時に出発する日帰り支援を実施、⑤若狭町災害VCに登録して活動。

現地に入って最初にボランティアの炊き出しのお手伝いをしました。その後、高齢の方が多い、別所川の上流部にある梅ヶ原地区へ入りました。道路は砂まみれで、流されてきた大きな石が畑に転がっている被害状況を見て驚きました。私たちは土砂の運搬や側溝の土砂を掘り出すお手伝いをしました。



若狭町水害復旧支援ボランティア

斉藤 2014年11月の長野県神城断層地震の際には、小谷村に学生と教職員のボランティア14名で支援に行きました。帰省中に被災した学生への個人的な支援、日福大OBが組織する長野県人会を支援する間接的な支援で現地に駆けつけました。白馬村と小谷村において、避難所や宿泊施設へのボランティアに入りました。

集落に着くと、多くの家が損壊していて、壊れてしまったものを運び出すお手伝いをさせていただきました。

活動で留意していること 災害VC・学生スタッフの役割

永田 災害ボランティア活動をしていく中でVCとして配慮していることは、事前学習・活動・活動後の振り返り・報告会をしっかりと行っていくことです。

事前学習では、現地の状況、何のためにボランティアに行くのか学習します。現地で起こり得るリスク、被災された方に対する配慮、ボランティア自身の危機管理を学ぶことも重要です。

斉藤 振り返りでは、実際にどんな活動をしてきたのかはもちろんですが、活動の中で出会った人が言っていたこと、自分が感じたことなどを話し合っています。

永田 ボランティアをしていると、もうこうできたのではないかと思うことが沢山あるのです。

斉藤 自分は小谷村での活動で被災されたおばあさん宅のお手伝いをしました。欠けてしまったお皿は使えないで捨てるしかありません。おばあさんが大切にされていたものを捨てなければならぬことにモヤモヤする気持ちがありました。

野尻 私たちは寄り添うことの大切にしています。学生たちは被災地で多くの人に出会い、いろいろな話を聴いてきます。「本当にこれでよかったのだろうか」「自分は寄り添えたのだろうか」。深く考えることがモヤモヤという表現につながります。みんなで話し合い、振り返りを重ねて行いながら、報告会では生のモヤモヤしたことも含めて学生や地域の方々に伝えています。

人と人を結ぶ、地域を結ぶ

斉藤 被災地で子どもの学習支援に関わったときに、被災地の教員の方が「大人でも子どもでもない存在の学生が来ることは大きい」とおしゃっていました。

永田 大学生は幅広い世代の方から声をかけてもらえます。

斉藤 「災害の問題は人ごとではなく、自分たちで何かやりたい」という学生の声もあります。「学生の力が必要だ」という地域の方の声もあります。現在、「みんなの減災カレッジ」など地域の防災・減災の取り組みも行っています。多様な活動を通して、学生と地域の方々がつながっていくことも地域の減災の1つだと思います。

被災地や地域のニーズと、支援したい学生の思いを、マッチングしてつないでいくのがVCの役割であり、学生スタッフが被災地の方々や地域の方々と一緒に活動することで、この関わりを継続していくことができると思います。

災害時の生活は普段の生活のあり方からのつながりだと思います。福祉を学ぶ学生としてその気持ちを忘れずに寄り添い型支援を考え、実践していきたいです。

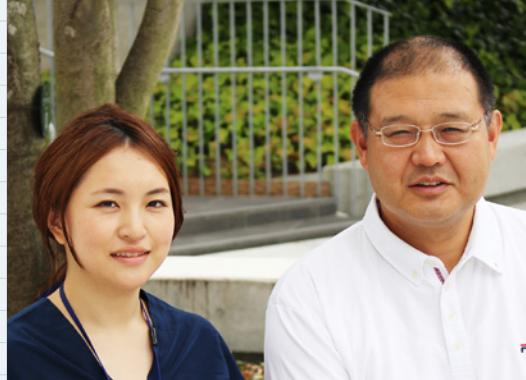
私たちのボラセン宣言

- 私たちは地域を知りつながりで、減災につなげます。
- 私たちは活動の意味を理解し確認しあえるボラセン!!
- 私たちは小さな力を見逃さない継続した支援をします!!

私たちのボラセン宣言



地元大学の強みを活かして 地域の様々な団体と 連携した活動



広島修道大学
ひろしま未来協創センター
課長
平岡 健 さん(右)
ピア・カウンター
なかすが あや
中寿賀 綾 さん(左)

学生の自主活動を支援する ためのセンター

中寿賀 ひろしま未来協創センターは、2008年に「総合研究所」から「学術交流センター」への改称を経て、2014年4月1日に今の名称になりました。これまでの研究支援に加えて、さらに研究成果を地域社会へ発信・提供することを促進するため、名称を変更し、再始動しました。広島修道大学は、「道を修める」という建学の精神に基づき、「地域社会の発展に貢献する人材の養成」、「地域社会と連携したひとづくり」、「地域社会に開かれた大学づくり」を理念に掲げています。本センターでは、本学と地域をつなぎ、地域課題を地域の方とともに解決できる人材の育成が実現できるよう努めています。

本学では多くの学生が、地域でボランティア活動をしています。防災や被災者支援では、東日本大震災のあと、「HUG-YOU」という団体が結成され、

昨年8月の広島土砂災害の際には地域で活動されているNPO等と一緒に活動を行いました。本センターは、各団体を統括するという立場ではなく、各活動の情報共有や学内団体間の交流、ボランティア活動をしたいという学生に対する活動紹介・相談など、後方支援やアドバイスを行うような位置づけです。



広島土砂災害時の活動の様子

地元の大学だから地域の様々な資源とつながることができる

中寿賀 昨年8月の広島土砂災害は被害も甚大であったため、本学でも学生自治組織である「学友会」や本学運

営委員会と協議しながら対応を確認し、広島市安佐南区社協に設置された災害ボランティアセンターに、どのように関わるかを決めました。私たちピア・カウンターは、災害ボランティアセンターが開設されてから6日目にはニーズ班に入って、被災された方のニーズ調査などに携わりました。これは、今後学生たちにニーズ調査のボランティアに関わってもらうことを考えた時、事前に災害ボランティアセンターの状況を知り、学生に対して説明や手順を伝えておく必要があったためです。

一方で、ボランティア活動の相談にくる学生の中には災害ボランティアセンターの運営側のボランティアではなく、直接現地で活動したいという学生もいましたので、その場合には、現地で安全に活動するための心構え、活動に必要な事前準備などの情報提供を行い、その上で社協の窓口につなぐというコーディネートも同時に行ってい

広島修道大学 ひろしま未来協創センター

スタッフ数: 16人

登録: 約800人の学生がボランティア登録

ピア・カウンターの業務について

ひろしま未来協創センターでは、2名のピア・カウンター職員が所属し、学生へのボランティア情報の収集・提供及び学生の自主企画活動支援を行っている。様々な自主活動を通して、学生の「社会で“生き抜く”ための基礎力」を養うことを目的としている。

おもな取り組み

●ボランピア活動: 学生がこれまであまり関わったことのない世代や地域の方々と接し、様々な経験を得ることを目的とする活動(ボランピア活動)の紹介・相談。

●情報交換・提供: 学内・学外で行われる体験参画型のイベントや市民活動団体などの情報交換や情報収集、書籍の貸し出し。

●その他にも、学内活動として

学生同士の学習支援、生活支援や大学行事の支援(例えば学内総合案内所(新入生サポートピア)、中学生キャンパスガイド)、学外活動として社会貢献事業への参画や卒業生との連携(例えば地域の学習支援、東日本大震災復興支援、小学生への教育支援など)を実施している。



広島土砂災害時の防災マップ作り

ました。

平岡 本学は安佐南区にありますが、今回の土砂災害で被災した地域とは離れていました。安佐南区の中心部にあるボランティア活動の拠点で、安佐南区社協と一緒に活動できたことは、情報収集や現場の状況把握を行い、それらを大学や学生ボランティアに伝えるのに有効だったと思います。

またボランティアの方の中には活動期間が短く、入れ替わりの早い状況がありました。私たちも地元大学として長期的に同一業務に入って活動することができました。

中寿賀 広島土砂災害では地元の様々なNPOとも一緒に活動しました。その中には学生時代に本学でボランティア活動をしていた人たちが所属する団体もあり、やはり日頃から連絡を取り合っていたようで、災害が起きた時に、それぞれがどう動くかなどについて確認していました。

本センターでは災害時の直接的な対応についてはもともと想定していなかったのですが、学内の団体や被災地でボランティア活動をする社協、NPOからボランティア募集の相談があったときに、学生に対して周知やコーディネートを行うことは考えていました。今回の広島土砂災害でスムーズに連携して想定外の災害に対応できたのも、普段から地域活動の拠点としてお互いの存在を知り、一緒に活動するなど顔が見える関係があったからだと思います。

大学ボランティアセンターの機能を生かした災害ボランティア活動支援

中寿賀 ボランティアに来る他県の学生にとって、やはり滞在費が一番の課題になります。特に今回の広島土砂災害は都市部であり交通アクセスが良かった反面、宿泊先を確保することが難しかったと聞いています。

本学は、学生を被災地に送り出す大学ボランティアセンターの役割も担っていますが、そこでも、安全確保や現地での信頼できる受け入れ先、被災地の状況を把握するなど、様々な配慮が求められます。

この点、大学機関ですので宿泊可能な施設をもっており、そこを提供することが可能です。大学ボランティアセンター同士のつながりの中で学生を受け入れ、活動に携わる際のフォローにも協力できます。この「人」「もの」が揃った拠点機能をもっていることは、大学ボランティアセンターの機能を果たす上で強みだと思います。

平岡 社協は1対1の対応や関係者に対する説明や広報には慣れていると思いますが、今回の災害ボランティアセンターのように1日に100人単位で来る人たちへの対応という部分では不慣れな点があったように思います。大

学では日頃から学生を対象に1対多数という対応を常に行ってていますので、そういうことも大学がボランティアセンターを担う上で、強みになるように思います。

災害ボランティア活動に対する大学ボランティアセンターの協力というと、被災現場での泥だし等の活動へ、学生を派遣することが中心になります。もちろん、それも被災地では大変重要な活動ですが、今回の土砂災害では、災害ボランティアセンターの運営支援という場面で、大学ボランティアセンターが得意とする役割や大学ボランティアセンターがもつネットワークを活かした災害ボランティア活動支援もできたのではないかと思います。



学内ピア活動の様子



新入生サポートピア

災害ボラセン 運営の現場

今後も多発することが想定される災害。今だからこそ知りたい災害ボラセンの設置・運営にあたっての基本的な考え方を、災害支援の経験豊富なひのぼらねっと・山下さんが対談形式で毎回紹介します。



公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 気仙沼事務所 現地統括。1972年生まれ。学生の時に阪神・淡路大震災で災害ボランティア活動を経験。新聞社勤務を経て同会の緊急救援事業で国内外の被災地で活動。2011年から東日本大震災の復興支援に携わる。

2000年、旅の途中で鳥取県西部地震に遭遇し、日野町でボランティア活動。被災後の地域づくり活動を継続している。県内外で防災減災や支え合いの取り組み支援を行い、災害時には社協やNPOなどのネットワークをいかして支援にあたる。

災害VC、復興期のNPOの活動

2015年7月20日、宮城県のシャンティ国際ボランティア会・気仙沼事務所にお邪魔しました。

災害VCにNPOが運営支援に入り、協働する意義

山下 白鳥さんは学生のとき、阪神・淡路大震災後にボランティアをされましたよね。

白鳥 被災地に行って「何かやらない」と思っていた、現地で支援活動をしていたNGO団体に飛び込みました。最初はボランティアという感覚は自分にも一緒に活動していた仲間たちにもなかったです。

山下 阪神・淡路大震災当時と今の災害VCでの活動で、違いなど感じていることはありますか。

白鳥 阪神・淡路大震災のときは、仲間たちと繰り返し議論しました。今考えてみると、災害時のボランティア活動・支援活動として「このケースはどこまでやるべきか」、「この方に自分たちは何ができるのか、どう関わるべきか」、「これで本当にやよいのか?」、一人ひとりがすごく意識していたと思います。

今、災害時にボランティアに参加する方々は、災害VCからの指示を受け入れて活動すれば間違いはないだろうということで、自分はどうすべきか、どこまですべきか、それほど考えずに「ボランティア活動ができてしまう」状況にあるのではないかでしょうか。

山下 災害ごとの積み重ねで災害ボランティア活動の認知、災害VCの仕組みは整備されてきましたが、住民が被災したときに、何をどうしてよいかわからないことに変わりはない、また災害ごとに地域の成り立ちや状況などが異なることを考えると、全国共通のマニュアル・事前の一律のルールで必要な支援ができるか、これは課題ですね。

シャンティ国際ボランティア会は多様な活動をされていますね。被災地支援や災害VCの立ち上げ・運営支援に、どのように取り組んでこられたのですか。

白鳥 2007年の中越沖地震発災後は新潟県柏崎市で、2009年の平成21年台風9号災害発災後は兵庫県佐用町に支援に入りました。

山下 災害時の支援において、何をどこまでできるか、その時々で違いますが、災害VCにNPOなどの力を活かすために、どんなことが必要だと思いますか。

白鳥 災害が起こった後で、どこまで対応できるか、優先順位をどうするのかを地元の社協だけで対応したり決めたりするのは、実際

は難しいと思います。災害VCが立ち上がり、様々な支援者が集まったときに、混乱の中でも協議しながら一つひとつ確認して決めていく、みんなで考え、悩む状況が必要なのではないかと思います。

また、NPO等の団体と協働で災害VCを運営するときに、作業分担をするだけではなく、意思決定のプロセスに関わってもらうことで、柔軟に対応するための「特効薬」になるかもしれません。その際には、目的意識を共有できる複数の団体を例えれば、災害VCの運営委員として位置づけるなどの工夫が必要かもしれませんね。そして方向性を決めるときは、住民の「つぶやき」やニーズに直接に接しているボランティア各自からの声を活かすことも大切だと思います。

どうすれば復興期に助けになれるか 「ここにいること」が大切と考えた

山下 現在、気仙沼に拠点を構えて活動されていますが、東日本大震災発災直後からの活動の展開はいかがでしたか。

白鳥 当初、宮城県気仙沼市へ来て、地元社協の事務所が被災している状況で災害VC立ち上げのお手伝いをしました。また、点在する避難所をまわり、避難されている方たちと信頼関係をつくろうと心がけました。市外への「お風呂ツアー」や炊き出しの調整、生活必需品の提供をしたりなど、地域の方々から相談されたり頼まれたりしたことにはどう応えられるか。2011年の秋頃まで試行錯誤していました。

その後は、何をすることが復興の助けになるのか、その中で自分たちに何ができるのか、自分たちは何をしたいのか、本当に悩みました。避難所で多くの人と出会い、出会った方々と話したことがきっかけとなり、まちづくりや漁師の生業支援、子どもたちへの支援などの方法が定まったのは、ようやく2014年です。

震災後、東北の被災地には「海」を怖がる子どもや大人の姿がありました。実際は、震災前から人々と自然との関係が希薄になっていて、津波によって海と人々の距離がさらに遠のいたのです。それで、海や自然に学ぶ自然体験や、地域に伝わる「暮らしの知恵」などからの学びを通じ、子どもたちが本来持っている「生きる力」を引き出す活動を地域の方々と一緒に行っています。

山下 当初から拠点を構えて活動しようと考えていたのですか。

白鳥 はじめから考えていたわけではありません。気仙沼で活動をしていくうちに、私たち

は今回、「ここにいること」が大切だと考えました。地域の方々と支援者やボランティアをつなぐことが私たちの役割だと思ったので、つなぐ立場の者は地元にいたほうが良い、そして地域にいて住民と「共に悩む」ことを大切にしたいと考えました。国内災害の被災地支援で本格的な拠点を置いたのは阪神・淡路大震災以来です。

発災から数か月後に、気仙沼市本吉地区(旧本吉町)で支援が足りていないと知ったことがきっかけで、お寺の駐車場をお借りし、シャンティの気仙沼事務所をつくりました。

山下 活動を継続してきて、今実感しているのはどういうことですか。

白鳥 「よりそう」ということは「違和感の無い存在」になることだと考えています。私たちにできること・できないことも含めて地域の方々に知って頂き、できることから地域の方々と一緒に活動する中で、私たちにどのような復興のお手伝いができるのか探していく。一緒に汗をかき、共に悩む中で、「よりそう」ができるのだと思います。

私たちの役割は、主体となって事業をすることではない。人がつながる「場」をつくり、「人と人とのつながり」ができる人材を地元で育て、住民が意欲的にまちづくりに参加できる仕組みを残していくことが最終目標です。

山下 災害直後から気仙沼に入り、社協やNPOなど多くの組織と関わり活動を見てきたと思いますが、全般的に今の状況はどうでしょうか。

白鳥 今の東北では、社協など各組織やNPOが各々の役割を工夫して進めています。しかし、それぞれが力を入れられる範囲は限られてきていると感じています。

だからこそ、この時期に来る前の発災直後の1、2年で、支援者どうしでどれだけ「本音」で語り合えたかということが、今現在のつながりに影響していると思います。

山下 災害時の支援は、発災直後の大変な時期を乗り越えるだけではなく、その先にある暮らしを落ち着かせたり、被災者のやりたいことを形にしていく助けになったりすることこそが重要なのですが、必要なことを適切なタイミングでやっておかないと、時期が進んでから、支援している団体などが初めて手をつなごうとしても困難な状況があるのですね。

だからこそ復旧期に災害VCなどで活動する人たちがつながり、課題を共有し復興に向かう目線合わせをしておくことが大事だと改めて実感しました。

ボラセンそもそもヒストリー

第6回

JYVA(ジバ)と1960年代のまとめ

JYVA(日本青年奉仕協会)の功績

1965年、海外で長期間支援活動を行う国際協力事業団の「青年海外協力隊」が発足し、その国内版的なものとして、1967年、「日本青年奉仕協会」(以下JYVA)が設立されました。そのプログラム「青年長期ボランティア計画(ボランティア365)」は、青年が全国各地の活動先に長期間滞在し、ボランティア活動に専念するというもので、これにより視野を広げ、地域・社会づくりに参画する人材を育てるというものでした。

JYVAと言えば、先ほどのボランティア365が有名ですが、果たした役割はこれだけではありません。日本のボランティア活動の推進に着目したとき、以下の2つは特筆すべきことでしょう。

①ネットワークの形成

既にご紹介してきた富士福祉事業団や大阪ボランティア協会は地に足のついた身近なネットワークづくりを実践していました。また、社協を中心とした善意銀行においても社協という組織の強みから社協関係のボランティアネットワークが中心でした。これに比してJYVAは全国規模のネットワークづくりを実践していくと言えます。組織にこだわらず、あちらこちらで噴出してきつつあった当時の日本の多様なボランティア活動を、縦割りにすることなく、1970年から

は年1回「全国ボランティア研究集会」を開催するなど、全国規模のネットワークをつくってきました。

②オピニオンリーダー

JYVAは、ボランティアや市民活動についての専門誌や、「ボランティア白書※1」を発刊し続けました。これは、単に、政府が刊行するような現状の報告というものではなく、民間の目線でボランタリズムやシチズンシップを大切に、その時代時代、あるいはその先の時代において重要と思われる事柄について論じたもので、全国のボランティアのオピニオンリーダーとして社会に発信し続けた意義は大きかったと言えます。

JYVAは2009年に解散してしまい、形は残っていますが、その功績の上に今の私たちがいることは間違ひありません。

ボラセンの原型がここに

その他、1960年代は、ボランティア本来のあり方にこだわり、民間性を重視する民間のボランティアセンターが、「大阪ボランティア協会」同様に、「○○(地名)ボランティア協会」という名称で、兵庫、横浜、静岡、山梨、京都等、1980年代にかけて続々と立ち上がってきました。

現在の日本のボランティアセンターは、このように1960年代に多様な組織が多様な

形で立ち上がってきました。ボランティアということばがほとんど知られていない時代にあって、道なき道を試行錯誤しながら熱い思いをもって、実践してきたこの時代の先人達によって、今の日本のボラセンの原型が形づくられたと言っても過言ではありません。今、私たちは、当たりまえに「ボランティア」ということばを使っていますが、これもこれらの人たちのがんばりがあってのことなのかもしれませんね。

これらを受けて、1960年代終盤(1968年)には、全社協は「ボランティア育成基本要項」を策定し、ボランティアの理念、育成の方向、善意銀行・ボランティアビューロー※2についての基本的なあり方等について指示しました。つまり、いよいよここへきてようやく、ボランティアやそれを支援するボラセンが、社会全体の動きに関わっていくことになります。

※1 JYVA解散後、ボランティア白書の発行は、「広がれボランティアの輪」連絡会議(全社協事務局)に引き継がれている。

※2 大阪ボランティア協会の当初の名称が「ボランティア協会大阪ビューロー」、富士福祉事業団では「富士ボランティアビューロー」というように、「センター」ではなく、「ビューロー」の呼称が多く使われた。センターよりも規模の小さい、事務局や受付というような意味。

団体を応援するために 知っておきたい助成金のキホン

第6回 「締切前日から準備を始めちゃいけない3つの理由ーその3」

最後の理由は、当たり前のようにできない、のことです。

◆理由その3『え？ そんなことするの？』にならないために

応募書は、いつも誰が書いていますか？ 代表？ 応募する活動の担当者？ 前日から準備を始めたとき「書いた人だけが応募書の内容を知っている」ことに、なっていますか？ これが、とても危険なのです。

ある助成財団の人からこんな経験を聞いたことがあります。

「審査員が満場一致で『助成したい』となった団体に、最終確認としてそれまでやり取りをしていた連絡責任者ではなく、代表に電話をしました。すると、『何のことでしょうか？』…この瞬間、不採用が決まりま

した。どんなにいい計画でも、団体として活動を実施できる体制にないと判断されたんです」

助成金は応募された内容に対して判断され、助成が決まります。ですから、採用された後でメンバーと話し合って「このA活動よりB活動の方がいいよね、目的一緒だし」と勝手に活動を変えることはできません。助成金によっては経費の変更も難しい場合があります。せっかく助成されたのに、いざ活動しようとしたところで方向性の違いがわかり、活動が頓挫してしまった…そんな話も聞いたことがあります。

応募書を書く前に団体メンバーで相談し、書かれた応募書をみんなで読み返し、そこで計画をもう一度練りましょう。そうやってできた応募書は、具体性や計画性が違う

助成金の応募や、活用のために押さえておきたいポイントを毎月わかりやすく教えていただきます。

ます。採用される確率が高くなり、採用後もスムーズに活動に移れるのです。何より、団体メンバーのやる気が高まります。

VC職員等の担当者は、団体には助成金の情報提供だけでなく「せっかく助成金に応募するなら、団体が元気になる機会としても活用しましょう！」と、アドバイスしてみてくださいね。



中央共同募金会
企画広報部

じょう ち さん
城 千聰 さん

2003年から都内社会福祉協議会でボランティアコーディネーターとして勤務。2011年4月より現職。現在は主に東日本大震災の被災地で活動するNPOなどを支える「災害ボランティア・NPO活動サポート募金(ボラサポ)」の助成金を担当し、これまでに4300件以上の応募書を読む。ボラサポ公式Facebookページで情報発信中。



ボランティア行事用保険のお知らせ

ボランティア行事用保険は、地域福祉活動やボランティア活動の一環として行う各種行事における様々な事故に対する備えとして昭和59年に発足し、以来、多くの皆さまにご利用いただいています。

「ボランティア行事用保険って、どんな保険なの?」

- ①ボランティア行事の「参加者のケガ」や「主催者の損害賠償責任」を補償します。
- ②行事開催地への往復途上のケガも補償の対象です。賠償責任の補償は主催者責任が問われた場合のみ往復途上の事故も対象となります。
- ③ケガの補償以外に食中毒も補償の対象となります。また、Aプランについては熱中症(日射病・熱射病)も対象となります。(Bプランは対象となりません)
- ④宿泊を伴わない行事はAプラン。宿泊を伴う行事はBプランとなります。

		補償金額
死亡保険金		400万円
後遺障害保険金(限度額)		400万円
入院保険金日額		3,500円
手術保険金	入院手術	35,000円
	外来手術	17,500円
通院保険金日額		2,200円
賠償責任	対人	2億円
(限度額)	対物	1,000万円

		保険料
Aプラン	A-1	28円
(宿泊を伴わない行事)	A-2	126円
	A-3	248円
	1泊2日	239円
Bプラン	2泊3日	293円
(宿泊を伴う行事)	3泊4日	298円
	4泊5日	352円
	5泊6日	357円
	6泊7日	362円

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp/>

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。



「ご加入にあたって」

- Aプランは行事の危険度に応じてA1~A3の3区分となります。(詳しくはパンフレットをご覧ください)
- 加入手続き完了の翌日以降、補償開始となりますので、余裕をもって加入手続きを済ませてください。
- 不特定多数の参加者が見込まれるために参加者か否かを特定できない(名簿が作成できない)行事は加入できません。
- Aプランの最低加入人数は20名です。

「変更の手続き」

行事日程が順延となった場合は、加入を受け付けた社協を通じて、原則として行事開催予定日の前日までに、変更手続きをしてください。
あらかじめ順延日が決まっている場合は、加入の際、加入依頼書に順延日を記載しておいていただければ、改めて連絡いただく必要はありません。
なお、順延が当日にしか判明しない場合は、翌営業日までに速やかに連絡してください。

ボラフェス ふくしま番外編



2015年の全国ボランティアフェスティバル開催地・福島。 福島のことをもっともっと知って皆さんもボラフェスふくしまに参加しましょう！

震災で避難を余儀なくされた方々が暮らしている仮設住宅では、さまざまな活動が行われてきました。レクリエーションを活かした「サロン活動」がその一つです。現在多くの仮設住宅で「元気づくり」のサロン活動が行われています。また、子どもたちの体力や運動能力向上のために、福島県内のレクリエーション関係者がたくさんの活動を継続しています。今大会では、具体的なレクリエーションボランティアのセッションも行われます。

福島で大会が行われる時期には、新米、新そば、リング…、美味しいものがたくさんあります。郡山のグリーンカレー、二本松のあだたらカレー、白河ラーメン、喜多方ラーメン、福島の円盤餃子、なみえ焼きそば、どうですか、想像しただけでも、よだれが出そうでしょう。さあ、一緒に！今年の秋は、福島へ行こう！！



全国ボランティアフェスティバルふくしまの円滑な開催、運営に資するための寄付金及び協賛広告を募集中
<https://www.facebook.com/volufesfukushima>



活動風景

INFORMATION

第24回 全国ボランティアフェスティバルふくしま

2015年11月21日(土)・22日(日)

申込締切 平成27年10月9日(金)

メイン会場 ビッグパレットふくしま (福島県郡山市)

参加申込受付中!たくさんのお申込みお待ちしています!

参加申し込みの詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.fukushimakenshakyo.or.jp/vffukushima/index.html>

Facebookでは、大会の舞台裏を公開中!

<https://www.facebook.com/volufesfukushima>

お問い合わせ
第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会事務局
(福島県社会福祉協議会内)

〒960-8141
福島県福島市渡利字七社宮111番地

TEL:024-523-1254

FAX:024-523-4477



事務局だより

8月の終わり、駅のホームにセミがひっくり返ってバタバタもがいていました。最期を迎えるようとしているのだな、と感慨深く眺めていたら、1羽のカラスがどこからともなく降りてきて、バリバリと音をたてながらセミを食べて飛んでいました！ はかないセミの一生の、衝撃的な最高期を目の当たりにし、夏の終わりを実感した瞬間でした。(星野)